

謝辞

このたび八幡浜新聞社のご厚意により、2014年6月2日 八幡浜文化会館(ゆめみかん)で開催された災害講演会「米国海兵隊トモダチ作戦のその後」の講演記録(全文)を掲載いただきました。

さらに、より多くの方々にお読みいただくために「災害医療コーディネーターホームページ」

<http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/sennyu/home.html#eld>

に掲載させていただきました。皆様のご協力に深謝申し上げます。

2015年3月7日

市立八幡浜総合病院麻酔科救急部 越智元郎

資料

1. 八幡浜新聞:米国海兵隊トモダチ作戦のその後
—ロバート・D・エルドリッジ博士 講演記録—
講演(全文)+質疑応答

- ①2月4日、②2月5日、③2月6日、④2月9日
⑤2月10日、⑥2月12日、⑦2月13日、⑧2月16日
⑨2月17日、⑩2月18日

2. 参考資料:米国海兵隊トモダチ作戦のその後
—ロバート・D・エルドリッジ博士 講演記録—
八幡浜医師会報 通巻76号、2014、p.10-18(2014年12月26日発行) 講演(全文)のみ

災害講演会

トモダチ作戦の その後 (日本語講演)



ロバート・D・エルドリッジ博士

アメリカ合衆国海兵隊
太平洋基地政務外交部次長

東日本大震災でトモダチ作戦(災害救援・復興支援)に参加

日時：平成26年6月2日(月)
18:00～19:30(開場 17:30～)
場所：八幡浜市保内町宮内1番耕地118
文化会館(ゆめみかん)サブホール

入場料：無料 主催：八幡浜市 共催：市立八幡浜総合病院

卓上一言

東日 本大震 災発生 からわ ずか数 分後、 米軍海 兵隊は危機管理室を立ち上げ対応を検討し始めていたという。もちろんこのとき、まだ日本政府から救援の要請は来ていない▼水曜日から2面に連載しているロバート・D・エルドリッチ博士の講演記録は、震災に際して米軍が行った救援活動『トモダチ作戦』を検証している。昨年6月2日ゆめみかんであった講演会の始終を、市立病院の越智元郎副院長がまとめられた▼講演を取材したときにも思ったことだが、想定外の激甚災害に遭った直後の東北で、実質的支援の多くは自衛隊と米軍に依っていただろう。訓練された人員の組織的活動と機動力でなければ、救助・救援が円滑に進まず、被

害が拡大したことは想像に難くない▼博士は『トモダチ作戦』での自衛隊と海兵隊などの連携について「成功したが、逆説的」と評価している。それは、これまで共同訓練を行っていない在日米軍と自衛隊が初めて共に活動し、たまたま成功したのは良かったが、次に成功するかどうかの保証はない、という意味だ▼そこで博士は災害に備え、行政・自衛隊・米軍・医療など各機関の関係を構築しようと訴える。市と伊方町が5日に医師会と結んだ協定(きょう報道)は、まさにそれ。いざというときスムーズに協力態勢に入れるよう、人脈づくり・情報共有・信頼関係を築こうというエルドリッチ博士の提唱に叶う▼米軍との関係構築は複雑な問題も孕んでいる。が、災害による非常時と戦争は分けて考え、迅速で強力だった『トモダチ作戦』に改めて敬意をもって感謝したい。



講演会風景
2014.6.2

はじめに

2014年6月2日、八幡浜市主催（市立八幡浜総合病院共催）で米国海兵隊太平洋基地 政務外交部（G-7）次長（政治学博士）ロバート・D・エルドリッチ氏の講演会が八幡浜市文化会館（ゆめみかん）で開催された。本稿は「トモダチ作戦」のその後」と題した氏の講演と、市立八幡浜総合病院からの2つの話題提供およびエルドリッチ氏との質疑応答を、氏並びに関係者の御許可のもとに講演記録としてまとめたものである。

講演中にもあるように、米国海兵隊は2011年の東日本大震災の被災地において、温かくかつ効果的な支援をわが国に提供した。海兵隊はさらに、東日本大震災を上回る規模の犠牲者数が想定されている南海トラフ巨大地震においても適切な支援を実施できるよう、非災害時における日米関係者のネットワークづくりを模索している。

氏は講演会当日、八幡浜湾を一望するや「ここは海兵隊が活動した気仙沼市とそっくりですね！」と声を挙げられた。いつか大地震が当地を襲ったときに、愛媛県南西部に展開される在日米軍の活動から、2014年に行われたこの講演会の縁が思い出される日が来るかも知れない。

講演会の記録

司会者

それでは米国海兵隊・太平洋基地 政務外交部次長 ロバート・エルドリッチ先生の講演会を開会致します。最初に八幡浜市長 大城一郎より挨拶申し上げます。

八幡浜市長 大城一郎

皆さん、今晩は。本日は昼間大変お仕事でお疲れのところ、八幡浜市防災講演会にお集りをいただきまして、誠にありがとうございます。また、講師のエルドリッチ先生におかれましては、本日の講演会をお願いしましたところ、大変ご多忙のところ、本日もここまで来られるの

に高知から来られて、その後山へと行かれるような、本当に山へとお引き受けをいただきました。誠にありがとうございます。さて、2011年3月に発生を致しました東日本大震災の教訓を総括する形で、防災対策基本法の改正を始めとする防災、減災に関する法律、指針、計画等の整備が行われておりまして、全国の自治体は国の基本方針に基づいたさまざまな対策をハード面ソフト面、両面から懸命に展開をしているところであります。これらの施策を実施する中で基本的な考え方として定着しているのが大規模災害に向き合う際にはより広域で対応することの必要性でございます。現在、県内の自治体、警察、消防機関等の連携はもとより、自衛隊や県境を超える自治体との連携の強化が取り組まれておるところであります。一言で

連携と言うのは簡単でございますが、災害時においては支援を受ける側、支援をする側、双方の立場における役割分担を明確にし、それを具体的な行動としてイメージができるまでに理解、認識を深めておくことが必要であり、イメージするためには、日頃からの顔の見える関係、これが前提になると考えているところでもあります。

現在、南海トラフ巨大地震に備えて、被害が予想される自治体と在日アメリカ軍の合同防災訓練、そしてこれらを通じた連携強化の取り組みが始まっております。顔の見える関係づくり、そういったところにおきましては、本日エルドリッチ先生を講師にお招きできたこと、これこそが本来の震災など災害における顔の見えるそういった対応につながっていくのかなと思っております。本日の講演では東日本大震災の際に在日アメリカ軍が実行されました災

害救助、救援および復興支援であります。トモダチ作戦、これの裏面を、ご紹介いただけたと思います。大規模災害時の連携を考える上で自治体、防災関係機関の果たすべき役割を別の角度から、今までとはちよつと違う角度から見つめ直す絶好の機会になるのではないかと感じております。本日は皆さん、よろしくお願い致します。

司会者

本日の講師は米国海兵隊・太平洋基地 政務外交部次長 ロバート・エルドリッチ先生でございます。先生は米国ニュージャージー州のご出身で、ヴァージニア州リンチバーグ大学を卒業後、神戸大学大学院に

米国海兵隊 トモダチ作戦のその後

ロバート・D・エルドリッチ博士講演記録①

文責 市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

おいて政治学博士号を取得されました。その後日本国内の大学や研究所等の研究員・助教として、日米関係史を専門に研究指導に当たられ、日米関係の重要性について積極的な発言をして来られました。特に沖繩問題に関しましては深い認識を示す業績を残されており、2003年には著書「沖繩問題の起源」でサントリ―学芸賞を受賞されました。その視点を持ちまして、2009年に大学教員を辞され、米国海兵隊外交政策部長に就任されました。一方、沖繩問題の解決と日米関係の緊密化のために尽力されており、東日本大震災後に海兵隊が実行したトモダチ作戦においては、調整役として日本側への窓口を務められ、被災地の救援、復興活動に大きく貢献されました。

本日は、「トモダチ作戦のその後」と題しまして、「講演を賜ります。それでは先生、よろしくお願致します。

講師（ロバート・D・エルドリッチ博士）

ありがとうございます。皆さん、今晩は。先ほどは大城市長さんから温かいご紹介をいただきました。この八幡浜市に来るのは初めてですけれども、最後ではないと思っております。

今夜、トモダチ作戦を中心に話したいと思いますが、その作戦の展開の仕方とその教訓を皆さんと共有できたらいいなと思っております。さらに、3年前の悲惨な状況から現在に至るまでの経過を中心に、どのような連携をして来たのかを皆さんに紹介したいと思えます。その連携というのは、次の南海トラフの地震に備えるために、またそれ以外の、東海・東南海地震が予想される地域において各地方自治体との緊密な連携、先ほど市長さんがおっしゃったような顔の見える関係を構築しようとしている所ですけれども、その一環として、本日愛媛県を訪問させていただいています。

昨日高知県の総合防災訓練を視察したのですけれども、高知県は実に頑張っていました。そして自衛隊第16旅団の皆さんが非常に熱心に取り組んでいました。明日は岡山大学へ行きますが、そこでは学生たちの役割は何なのかについてお話したいと思っております。

私は沖繩に住んで5年になりますが、その前の19年間関西に住んでいました。ちょうど大学院の時に神戸で大震災が発生しました。その日は決して忘れません。あれから自分の外交史の研究とともに、防災、災害についての研究も継続して来ましたが、現在研究だけでなく、実務的に政策提言をして市民を守ることを推進する立場にあります。また十分ではありませんが、各自治体の皆さん、自衛官の皆さんほか、いろんな組織と連携して、よりよい対応・対策を一緒に作って行きたいと思っております。

由は何なのかをまず紹介したいと思えます。

この日米の作戦がうまくいった背景はやっぱり、自衛隊を始め東北の皆さんが非常に粘り強く耐えられたということだと思います。つまり、冷静な対応、強い自立心がなければあの悲惨な状況を乗り越えられなかったと思います。あの時は地震だけではなく津波、津波だけではなく原発もあり、それだけではなく、3月の東北はめちやくちや寒い。その直後に大雪が来たのですが、普通の人には耐えられないような寒さだったのです。こういう状況の中で、いつ救援、支援が来るか分からない中で、絶望的な状態の中でみんな我慢

援を呼びかけられなかったのですが、今回はそれと違って早くから支援を要請しました。後ほど説明しますが、海兵隊は震災発生の数分後に危機管理室を立ち上げて、その対応を検討していました。要請がまだ来ない段階で、マグニチュード9、大津波を伴う、このような大災害であれば確実に要請が来るという前提で準備をしていました。

もう1つの成功した背景としては、やっぱり自衛隊の皆さんだったと思います。その時10万人態勢で動員されましたけれども、この相当の人数で、被災地だけでなく全国から駆けつけて、事前の計画に基づいて早くから対応できました。その危機

さらに成功した背景としては、日米の強い連携で、これが政府間もそうですが、さらに自衛隊と在日米軍の強い連携ができていました。先ほど日本国内の防災訓練ではあまり訓練して来なかったと申し上げましたが、海外ではいろんな局面で一緒に対応してきました。そこでその信頼関係、コミュニケーションなどができて、それを日本国内で応用することができました。組織的な協力関係はもちろんですけれども、日米同盟ができてから62年になり、この間の人間関係の強い信頼関係、交流がすごい。後ほど紹介しますが、こういう人間関係がある問題や情報を共有するために大きな役割を果たしたと言えます。

もう一つ成功した背景としては、これは米軍という言葉を何回か使ったのですが、実はアメリカ国民全体が日本の応援をしていました。国民全体、政府全体、いわゆるオールアメリカが対応していたということをぜひご理解してほしいと思います。

成功した背景にはまず東北のみなさんの自立心がありました。が、言ってみれば、それは日本国民の国民性だったと思います。冷静な対応でした。さらに、日本は先進国であり今まで数多くの災害を経験したのですが、災害ごとにちゃんと教訓を学んで対策を取って、少しずつ少しずつ、災害に強い国家になってきました。また、日本政府が非常に早くアメリカに対して、また国際社会に対して、救援の要請をしました。19年前の神戸の震災の時には、まだ危機管理体制ができておらず、そして災害規模の大きさをあまり認識しませんでした。結局、国際的な支

援を呼びかけられなかったのですが、今回はそれと違って早くから支援を要請しました。後ほど説明しますが、海兵隊は震災発生の数分後に危機管理室を立ち上げて、その対応を検討していました。要請がまだ来ない段階で、マグニチュード9、大津波を伴う、このような大災害であれば確実に要請が来るという前提で準備をしていました。

兵隊ができてから239年を迎えますが、相当の経験を持っている組織です。その後海兵隊は、日本に対して前方展開しています。沖縄と岩国そして静岡県のキャンブ富士にいます。もしこの海兵隊、あるいは米軍が前方展開しなければつまり日本にいなければ、こういった早い対応は難しかったと思います。

もう一つ成功した背景としては、これは米軍という言葉を何回か使ったのですが、実はアメリカ国民全体が日本の応援をしていました。国民全体、政府全体、いわゆるオールアメリカが対応していたということをぜひご理解してほしいと思います。

もう一つ成功した背景としては、これは米軍という言葉を何回か使ったのですが、実はアメリカ国民全体が日本の応援をしていました。国民全体、政府全体、いわゆるオールアメリカが対応していたということをぜひご理解してほしいと思います。

お話の前半として、まずトモダチ作戦について、次の震災対応の参考になるもの、もしくは参考にならないもの、もしくは区別して紹介したいと思えます。このトモダチ作戦は、見ている限りでは非常に分かりやすい任務でした。まず人道支援、災害救援活動を実施します。そして特に自衛隊との連携を通じて、日本政府を支援します。さらにそれ以上死者が増えない、あとはその被害が拡大しないようにするという任務でした。ただ、それをどうやって実施するのか、それをどうやって実施するのかがやっぱり大きな課題だったと思います。

この作戦は振り返ってみればかなり成功したと思えますが、これはかなり逆説的なことだと思えます。というのは、その前までは一度も在日米軍と自衛隊が大きな災害に関する共同訓練とか防災訓練を行ったことがありませんでした。初めてその実践を行った作戦だったのです。それだったからうまくいかないはずでしたが、実はうまく行きました。しかし次回うまくいかどうかは保証がありません。従って、今から次の震災に備えてやらなければならないこと、各組織がやらなければならないことがあります。自衛隊、米軍を含めて、医療関係の皆さんにとって行政側にとって、さまざまな組織があるのですけれども、次の震災がいつ発生するかわからないですけれども、一日一日を大事にし、そういった人間関係、組織間の関係を作るのが、私たちの仕事だと思えます。で、振り返って作戦がうまくいったところから、その理

米海兵隊 トモダチ作戦のその後

ロバート・D・エルドリッチ博士 講演記録②
文責 市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

強く対応していました。成功した背景にはまず東北のみなさんの自立心がありました。が、言ってみれば、それは日本国民の国民性だったと思います。冷静な対応でした。さらに、日本は先進国であり今まで数多くの災害を経験したのですが、災害ごとにちゃんと教訓を学んで対策を取って、少しずつ少しずつ、災害に強い国家になってきました。また、日本政府が非常に早くアメリカに対して、また国際社会に対して、救援の要請をしました。19年前の神戸の震災の時には、まだ危機管理体制ができておらず、そして災害規模の大きさをあまり認識しませんでした。結局、国際的な支

一方、実は現場や現地でいろんな課題がありました。その課題を幾つか紹介したいと思えます。その課題には組織的な問題もあり、そしてあれから改善したのもあるのですが、これを一人の意見としてぜひ聞いていただきたいと思います。これが政府の公式な見解とか、海兵隊全体を代表する意見ではなく、仙台にいた人間として、自衛隊と緊密に連携した人間として、感じたことを伝えたいと思えます。

まず、これはどの危機でも同じ問題があると思いますが、情報を正確につかむことが大変でした。色んな噂があり、また色んな違った情報が飛び回っていたのですが、何が本当かということ判断するのが自衛隊あるいは自治体にとって大変でした。さらに、その情報を上のほうに吸い上げて、今度米側に伝

達されたときに、その情報が正確かどうか、そしてその対応が合っているかどうかという調整に最初の段階で時間がかかりました。調整メカニズムが軌道に乗ったのは約1週間後の18日頃だったと思います。それが早いのか遅いのがちよつと分らないのですが、おそらくこれが1回目の大規模な作戦だったので、決して悪くないと、冷静に判断あるいは評価した場合は言えるかも知れません。しかし、こういう問題にずっと取り組んで来た人間としては、ちよつと遅かった気がします。

米国防 海兵隊トモダチ作戦のその後

ロバート・D・エルドリッチ博士 講演記録 ③

文責市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

年にまだ大阪大学に在る間、日本の大規模災害における在日米軍の活用における日

ついて政策提言をまとめたのですが、残念ながら、それは無視されていました。これは神戸の現象ともちよつと似ているのですが、当時2006年から2011年の3月10日まで日本には過大な自信があったと思えます。しかし、どの国でもそのような大きな災害には一國で対応できませ

ん。たまたま3月10日に官邸の方に、その政策提言をもう一度送りました。震災の前日でした。送った理由は、当時菅総理がオバマ大統領に会う予定だったことです。二人が会っても話しすることがあまりなくて、あまり進展がないと思って、官邸に防災協力のあり方、特に日米の相互支援協定を締結することを官邸に促しました。するとその翌日、大震災があつて、幸いに私の提案の中に細かい調整の在り方、細かい課題が書かれていたので、おそらく官邸にとって参考文献になったと思えます。少なくとも米軍にとっては大きな参考になり、あれから自衛隊がすごく頑張つて進んでいるところですけれども、いわゆる統合運用体制が2011年の段階ではまだちよつと課題がありました。2006年3月に統合運用体制が組織的にはできたのですが、本当の意味で実践ができたのはその5年後、2011年3月の東日本大震災でした。調整所にはもっぱら陸上自衛隊の方々がおり、海上自衛隊の方あとは航空自衛隊の方々が、時々参加していましたが、見ていた限りではちよつと調整が難航していました。そのトモダチ作戦が自衛隊に大きな示唆を与えたのは、統合じゃないと大きな災害にはとても対応できないということだったと思えます。で、徐々にその統合運用体制が強化されるようになっていきます。

当時2011年には建前上は統合でしたが、実際には共同だったと思います。各自衛隊が一緒に仕事していたと思えますが、本当には統合ができていませんでした。この3年間、本当にいろんな意味で進んでおり、感動しています。毎日沖繩で、あるいは内地で、自衛隊とお付き合ひさせていただいているのですが、毎日感動する場面ばかりです。

(つづく・全10回)

2014年6月2日
ゆめみかんで講演



四つ目の問題、これもあれからだいぶ改善していると思えますけれども、被災地にある問題に関して日米それぞれの解決策、あるいは対応策の考え方にちよつとずれがあったと思えます。

最終的に米軍は日本政府支援のために、日本政府の要請通り、あるいは要請に近い形で対応するのですが、この問題の認識に若干ずれがありました。

一つの例を上げますと、仙台空港を開くという作戦は米側提案でした。本来ならば自衛隊あるいは日本側が提案するべきでしたが、それがなかったのです。で、私たちは3月12日の朝、内部で仙台空港を開くことを決めました。空港はその時点で浸水していたのですが、その解決は米軍、特に海兵隊にとつて特に問題ありませんでした。

なぜなら、水が引いて自然の状態に戻った後の滑走路、空港であり、がれきを撤去したらすぐ遠征基地、遠征空港として使えます。まったく問題ありません。しかし、自衛隊にとつてはたのびた想像を超えたものだったのです。で、日本政府にとつてもちよつと想像を超えたもので、半年ぐらいいないと片付けられないといふかなり消極的な考えだったのです。私たちが3月15日の朝、米軍として一番早く着いたのですが、空港の関係者と打ち合わせして、17日か18日くらいからもう飛行機が着陸す

るようになっていました。

いろいろな協力があったのですが、その出発点でした。その空港が使えるものかどうか、という区別の仕方が全然違っていました。おそらく自衛隊は日々、民間空港をあまり使ったことがなかったのだと思います。松島基地という自分の施設がありま

すので、この松島基地にも大きな被害があったので、自衛隊はある意味、パニック状態になりました。自分の施設が大きな被害を受け、一方民間の施設、港

にはたぶん余裕があります。しかし、米軍にとつては民間のものか、自衛隊や米軍のものかは、あまり関係がありません。使える物を使いましょうという考えでした。

その作戦は被災地のさなかにある空港を使つたらより早く救援物資、そして人を送り込むことができるということ、そうでなければ地上の混んだ道、あるいは危なくて使えない道、あるいは山形空港という山の中の、雪の中の、不便な基地や空港を使わなければなりません。それ

だつたら、ものすごく時間がかります。その自衛隊が考えられなかったシナリオを採用したら、結局まあ成功したのです。で、そのあと教訓として自衛隊の偉い方が、あ、やっぱり空の作戦が大きいですね、というお

話をしてくれました。だけど、その対応策をもっと柔軟に考えなければならなかつたと思つています。

それが私から見た自衛隊、あるいは米軍、日本側の課題でした。米側の課題としては、一

整庁が作った、その協議が日本のペースで動いていました。それでいいのですけれども、議題を日本側が行っているの、あ

らかじめ議題を作つて、場合によつて結論も会議前にできあがっています。会議には結構参加しているのですが、あれは米軍にとつて苦手です。もつと議論をしたい、哲学的に議論したい、全体的な話をしたいのです。

私は15日の調整上の会議をした日、正式な会合を開く前に1

く2時間全体的な話をしたら、より早く解決策に行き着いたのではないかと思います。急がば回れという言葉がありますが、結局、米軍の真の能力が分からない自衛隊が作った議題になつてしまつたので、米軍の本当の力は発揮することができませんでした。従つて対応がそれなりに遅れてしまいました。それから地方自治体にとつてどういう意味を持つかを考えると、時間

米海兵隊トモダチ作戦のその後

ロバート・D・エルドリッチ博士講演記録④

文責 市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

対応ですけれども、3月11日にすぐ準備を始めて、指令が夜中に出て出すべく出動させることができるようにしていました。海兵隊ほどの問題でも一番先に入ることがほとんどです。

従って、この災害でもおそろしく要請が来るということで、早くから準備して12日の朝から入りをまずほとんど関東まで送って行きました。当時まだCH・46という60年代からの古いヘリを使っていたのですが、現在、新聞で見られたと思うのですが、オスプレイというすごい能力のあるものが、2年前から配備されています。例えば、沖縄から仙台まで、あるいは関東まで、CH・46を使ったら1日半かかります。なぜなら各空港に降りて補給しないといけません。例えば、奄美大島、九州、最終的に岩国で給油し、そのあとずつと行くのですが、オスプレイだったらもうたった3〜4時間で行けます。オスプレイであれば空中給油ができるので、ある意味では無限に飛べます。あと速度が前のCH・46の3〜4倍くらい速く、航続距離も当然長し、搭載量は3倍です。しかし、2011年にはまだCH・46しかなかったのです。さらにKC・130という輸送機も送って行ったのですが、そのKC・130が今度6月中に岩国のほうに移転することになっていま

す。あと高速船も那覇軍港からほとんど送って行ったのですが、この高速船は浅いところに入れます。現地港湾の深さがちよつと分らないのですが、おそろしく問題なく入れます。船の中には約800〜900人、そして機材が入ります。それを重要拠点へ送ったのです。12〜13日には今度、仙台駐屯地にある東北方面隊が対応する組織だったのですが、そこにその前方司令部的なもの

が派遣されたのです。前方司令部が東北方面隊の建物の中に出てきたのですが、それは重要課題だと思えます。

最初はそこに必要最小限の人数しか派遣しませんでした。受け入れ側の組織をパンクさせたくなかったからです。私は政治顧問、調整役として派遣されました。写真は翌15日にこの海兵隊の一番上の人が彼の下の司令官たちを集めて、仙台に当時の統合任務部隊指揮官を務めていた君塚栄治氏を表敬訪問したときのものです。海兵隊が全面的に力を貸すという機会を伺っていたのですが、その人間関係がいかに重要かという話をちよつとしたと思います。

海兵隊の司令官はワーク中將ですが、彼が前に沖縄に勤務して

米軍 トモダチ作戦のその後

ロバート・D・エルドリッチ博士講演記録 ⑥

文責 市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

たのは2004年、2005年の時期でした。2004年というのは、その12月にスマトラ地震と大津波がありました。その時海兵隊が一番中心に派遣されていた組織でした。そこでその統合隊に任務部隊を編成し、ワーク中將がその責任者になりました。彼が再び日本で勤務するようになったのは2011年の1月でした。その2ヶ月後に東日本大震災が発生しました。スマトラ地震・津波と余り変わらないシナリオだったのです。彼は君塚長官のときの指揮官にインドネシアやフィリピンの災害のことをいろいろお話しして行ったのですが、実はこの二人は初対面ではなかったのです。実は君塚さんはずっと前、つまり2004年に沖縄で勤務していたのです。その時第1混成団

現在の第15旅団ですが、その团长でした。彼のカウンセラートだったのは、このワーク中將でした。従って彼らのコミュニケーションは非常にスムーズにできました。

さらに私の話ですけれども、その君塚長官に初めてお会いしたのは同じく2004年でした。そのあと彼が伊丹にある中部方面隊の幕僚になり、当時私は大阪大学にいたのですが、緊密な関係・連携を進めました。そのあと彼は防衛大学の幹事を務めるようになったのです。当時私の恩師、五百旗頭真（いおきべ・まこと）が防衛大学校長でした。その時もずうつと交流を続け、そのあと東北方面隊に行きました。2011年に彼のもとで勤めたことは私の人生の最も光栄なもので

同じ日に色んなできごとがあったのですが、午前中、先ほど申し上げたように空港の視察、現地のスタッフと調整したり、そして日米調整庁ができた。そしてその表敬訪問が行われました。あれから本格化するようになったのですけれども、先ほど言いましたように自衛隊側の情報収集の体制、そして私たちの伝達する体制、また調整の体制、そして米軍の中の関係者への要請の体制が確立するまではあと数日間かかったのです。1週間程度で何とかうまく起動することができました。私の夢は将来二、三日以内により細かい調整ができるような体制を作ることです。それを目指して、これからのいろんな地方自治体あるいは自衛隊、米軍と、色んな

コミュニケーションを取ろうとしています。

一方、トモダチ作戦に関して次の震災の参考にならないものが一つあると思いますが、これが日米の現地の調整庁の置き方と関係しています。東日本大震災の時の現地の調整庁は仙台にあったのですが、それはたまたまではなく東北方面隊の駐屯地が仙台にあったことによりま

す。もし南海とか東南海の地震になると、この方面隊の総監部はおそらく被災地にはなく、ご存知のように兵庫県の伊丹に置かれます。しかし、調整庁をそこに作っても、この現地、被災地の一番広い地域のことをどれほど感じる事ができるのか、わかるのか、正直ちよつと疑問があります。従って次の震災、特に南海・東南海地震のときに、どこに調整庁を作るかが日米そして自治体の大きな課題であると思います。でも、私が見る限りではまだ結論が出ていないと思っています。それに向けて、まだ進めなければならぬと思うのは、あらかじめ方面隊にとりあえず、調整上の枠組みを作るということです。そこに誰が派遣されるのか、あらかじめポジションを決めたいのです。そして、今のポジションにいる人の名前を付けて、米側のどういうポジションの人がそこに派遣されるのかをある程度決めて、可能な限り事前にその関係者の間でコミュニケーション、先ほど市長さんが言われた顔の見える関係を今から作る事ができればいいなと思っています。

3月の後半には、軌道に乗って自衛隊の要請に基づいてい

るんな作戦を行っていたのですが、本当の意味ではアメリカ軍の力のたぶん5%しか發揮できなかったと思います。それでもいいのですけれども、日本の様子に合わせて行っていたのですが、正直もつと潜在的な能力がありました。

海兵隊の作戦は4月の1週目が終わった時期に終えました。これが早いのか遅いのか、いろんな意見があると思うのですが、一つには、軍にできることは限られています。つまり政治・行政がやらなければならぬことがある。そして市民社会がやらなければならぬことがある。NGO、NPO、あと民間すなわち企業とか業者がやらなければならぬことが、それぞれの役割があるので、すべて軍がやるべきではないというの

は一つの背景です。軍しかできないことはありますが、軍でなくてもできることもあります。従って軍が対応する期間は実は結構短い。民間、あるいは市民社会あるいは行政、政治が最も困っている時しか活動しませぬ。あとのほうは、健全な社会の復旧、復興に向けて、軍が速やかに撤収するのが一番いいのです。

もう一つ、特に海兵隊の場合は何回も申し上げているのですが、次の危機に備えるための組織ですので、なるべく早く沖縄に戻って、次の準備を行います。従って、4月の半ばから米陸軍、在日米陸軍のほうにバトンタッチしました。正直、海兵隊は帰るのをきわめて嫌がり、泣きながら帰って行きました。だけど命令は命令ですので。救援ですけれども、沖縄からがもつばらですが、岩国も非常に大きな役割を果たしています。南海大地震のことを考えると、当然、岩国が大きな拠点になります。海兵隊の、現地に足を踏んだ人たちの数は合計で約2万人、海軍とかいろんな関係者、特に東北に派遣された人たちで、後方すなわち静岡県にあるキャンプ富士、山口県あと沖縄でも、数多くの人たちが支援活動に関わっていました。

写真でお示ししますと、上は3月14日に東北方面隊の本部の中に2階か3階の階段の上に、私たちの作業室を作ったのです。本当にもう数名規模だったのです。私の隣りにいるマスクの人はトヨタさんという方ですけれども、彼はもう昔から交流があった自衛官ですけれども、ものすごく話を通じたのです。皆さんにぜひこれからしていただきたいのは、ここにはたぶん色々な組織の方々がいらつしやると思いますが、今まで以上に人脈づくり、情報共有、信頼関係を作っていただきたいと思

下のほうは気仙沼の写真ですが、気仙沼は実は皆さんの町と私から見ればまったく変わらな

いくらしい状況にあります。大きな湾があつて漁業が中心の町で、津波が来たら相当な被害を受ける感じがします。気仙沼の方はそんな具合だったのですが、気仙沼湾のまん前に、大島という約3千3百名、人が住んでいる島がありますが、それが自然の防波堤になりました。結局その島が津波で二つに分かれてしまった。にもかかわらず、その犠牲者がわりあい少なかった。しかし、島ですので孤立してしまいました。海兵隊は特別な能力を持つており、海からの作戦として、どんな状態でも上

陸でできる能力があります。自衛隊がなかなか行けない島だったので水もあまりないし、電源・燃料がまったくなくない、あと食べ物ももう少なくなつてしま

いた。私たちは約1週間その島にいて、がれき撤去とか、いろんな町のサービスを復旧することに協力しました。実は今朝もちよつと電話でやりとりしていたのですが、現在でもその島の人々と交流を行っています。その一つは子供たちを毎年、沖縄に招待して、海兵隊の家にホームステイをしていただいています。さらに、大島のリーダーたちと海兵隊がいろんなところでトモダチ作戦の訓

話をしていきます。大島は一つのモデルになっています。どういうモデルかというと、大島が孤立してしまい、中央政府の機関があまりない状態、自衛隊もない状態で、結局地元のリーダーたち、リーダーというのは災害対策本部長そしてその顧問を務めていた菅原議員ですけれども、直接米軍と交渉したり、要請したり、調整を行っていました。私が考えているのは、次の心配特に南海、東南海、東海のものはおそらく東日本大震災より大きいものになり、相当の被害が出て来ます。沿岸地域には孤立する集落が山ほど生まれるのではないかと思つています。場合によつては自衛隊が到達できない、中央政府の機関の関係者が行けない所に、米軍が直接やり取りしなければいけないところがたくさん発生すると思ひます。じゃあどのようにコミュニケーションを取ればいいのか、という課題が出るのですが、なるべく早くお互いに会つて情報共有をしたり、米軍の関係者が訪問して、逆に自治体の方々が沖縄を訪問したりすることだと思ひます。大島の場合はその時までまったく縁がなかったところですが、それでも、それでもいい連携が被災地でできました。重要な参考、よいモデルになっています。

米国防トモダチ作戦のその後

ロバート・D・エルドリッチ博士講演記録 ⑥

文責市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

海兵隊にはさまざまな経験があるのですが、1番最初に申し上げたように、たった8、9年でアジア太平洋地域において、このような大規模災害に沖縄にある海兵隊が対応してしました。データを見る限り、アジア太平洋地域においてはだいたい年に1〜2回ぐらゐ災害が発生しています。ということは、昨年の11月にフィリピンでスーパー台風が発生したのですが、あれからも半年以上経っており、次の大きな災害が今発生してもおかしくない状態です。

海兵隊は色んな能力を持つていますが、先ほど言いましたように地上からの作戦、空からの作戦と、海からの作戦を同時に展開できます。海からの作戦は第31海兵遠征部隊を中心にやるのですが、東日本大震災の時の遠征部隊は、実は東南アジアにいました。ある国との訓練を終えて、もう一つの訓練にのぞむ直前に、今回の震災が発生しました。で、彼らは猛スピードで第2のふるさどである日本に戻って、日本政府が要請するまで待機していました。しかし、残念ながら長く待機していた。なぜなら、日本政府には遠征部隊がどういふものなのかがあんまり分からなかったからです。遠征部隊は人道支援のために活動する経験と能力を持つているのです。

私は阪神・淡路大震災の体験者でもあり、個人的にまた研究上、日本の災害に関心があり、東日本大震災の前から積極的に政策提言をしていたことは先ほ

ど申し上げた通りです。しかし、震災の後もし早く教訓をまとめず、次の震災の準備をしなれば大変なことになります。そして今回の2万人の犠牲者にどうやって顔向けをすることができるとか思っていたのです。そこで教訓を全国的に可能な限り、提供できたらいいなと思つていろんな研究機関、自衛隊、いろんな都道府県、経済界など、色々なところで発表してしました。そして、東海シナリオで一番被害を受ける可能性のある静岡県が私の昔の政策提言を新聞で見、知事が私のほうに連絡して、ぜひ防災訓練などに協力してくれないかという打診をしました。

米国防 海兵隊 トモダチ作戦のその後

ロバート・D・エルドリッチ博士 講演記録①

文責市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

てくれました。その前はまず教訓の話をしたり、人事交流をしたりしていたのですが、2012年の防災訓練に参加するようになりました。静岡県はいろんな意味では対策をして、その政治的な見出しは非常に進んでいるのですが、これがそういう意味では大島と同じように全国的なモデルになっていると思ひます。つまり、積極的に行政が在日米軍と連携しようとしているということ非常に面白いところ

の秋に打診しました。高知県はちよつと政治的には慎重だったのですが、徐々に認識が変わつて、特に2012年の8月に新しい見積もりが出た時、南海地震で32万人犠牲者が出るということ、かなり雰囲気が変わりました。そして、2013年の1月に高知県で講演する機会をいただきました。正直に言うと、もう一つの個人的な理由がありました。私の妻の両親は高知県出身で、私は何回も高知県を訪問し、被害を受ける地域を自分の目で見ていたのです。そのあと和歌山県、三重県とも、正式な連携ができ

地元の研究所とも交流しています。私のいろんな人脈を使って、沖縄の防災担当の方々たちよつと外の刺激を受けてもらつて、その町の計画に参考にしていただいたり、役に立つ情報を提供したりしています。

大学にも色々なお話をしているのですが、これは大学だけでなく市民もそうですけれども、次のシナリオがもし大きなものであつて、中央政府の能力を超える、そして自衛隊の能力を超える場合は、要請があれば米軍が来ると思うのです。その時、場合によつて孤立してしまふ地域がたくさんある中で、各一人一人、各市民の一人一人の自力という行動が非常に重要となつて来ます。従つて何ができるのかを、ぜひ一人一人で見たいと思います。

学生、特に若くて元気であと暇があるので、彼らに特に期待しています。実は留学生にも大きな役割があると思ひます。その日本語と自分の国の言葉の通訳、あるいはその国から来る支援団体の架け橋になれるので、ぜひ自分の町にいる外国人を積極的に取り入れて、巻き込んで行動したら、後悔しないと思ひます。

ちよつと長くなつてしまつたのですが、とりあえずここで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます。

へ対応がさらに難しくなるだろうということ、いろいろな組織と連携しています。特に赤十字とかあと、大学、琉球大学とかあと医師会の方々とか、あとは

司会者

それでは、ここから意見交換および質疑応答の時間とさせていただきます。最初に市立八幡浜総合病院 救急看護認定看護師の宮谷さんから、「当院における災害医療の取り組みについて」と題して、発表していただきます。

市立八幡浜総合病院看護師 宮谷理恵

市立八幡浜総合病院看護師の宮谷です。エルドリッチさん、貴重なご講演をありがとうございます。少しお時間をいただきまして、私の方から南海トラフ巨大地震への対応として、当院の役割について少しお話ししたいと思います。

当院は八幡浜市、伊方町など人口6万人をカバーする救急告示病院、災害拠点病院、初期被災者数は約200人で6階建、現在、非常電源は地下にあります。標高は1階床面5・9メートル、2階床面で10・5メートルとなっております。

南海トラフとは四国沖から東海沖の海底にある水深4000メートル級の深い溝のことを言います。東南海、南海地震の発生の周期を見ますと、1944年に東海・東南海地震、1946年に南海地震が起こっています。この地域では100〜150年に大きな地震が発生しており、30年以内に南海地震、東南海地震、東海地震などが起こる確率は約70パーセントと言われています。愛媛県による南海トラフ巨大地震の被害想定を見ますと、当地の最大の被害は震度7、津波高9・1メートル、地震か

ら最大津波到達までに72分と言われています。この間自分たちができることは何でしょうか。

大津波襲来時の当院の予想図です。当院では1階の天井まで津波が襲つてくるのが予想されます。ということは、非常電源も地下にありますので、ラインは途絶え、酸素や吸引等も使えなくなると予想されます。

こちらの表は、南海トラフ巨大地震の想定傷病者数になります。南海トラフ巨大地震では、当院に500人に近い重症患者が搬送される可能性があります。それ以外にも列車事故、道路での事故、火災なども予測されます。現在、建て替え中ですので

米海兵隊 トモダチ作戦のその後

文責 市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

後ろにあるクレーンなども倒れてくるのが予測されます。さまざまな災害が予測されます。

いつどんな災害が起きても対応できるように、平素より準備しておくことが大事になると思います。

当院では、搬送訓練、トリアージ研修会、災害訓練等、消防等の他機関と連携し、毎年さまざまな研修会を企画し、職員の意識を高めるとともに、災害に備える院内の体制を見直しているところです。先ほどエルドリッチさんの講演にもありましたが、

各個人の意識を高めるとともに、病院、市、町、消防、警察、自衛隊、地域全体で連携をとって、災害に備える必要があります。

しかしながら、大きな災害がきた時には地域だけでは抱えないこともありますので、在日米軍等のご支援をいただきたいと思

最後にありますが、こちらのスライドは、平成28年11月末完成予定の市立八幡浜総合病院になります。新病院では屋上にヘリポートが設置され、最上階に非常電源、免震構造に建て変わります。入院棟は津波の来ない3階以上に配置されます。病院が新しくなったとしても、大きな災害を免れるとは限りません。今後も防災、災害に対する意識を高め、平素より職員一同災害に備え、体制づくりに努めて行きたいと思

あります。清聴ありがとうございます。

ありがとうございます。続きまして、市立八幡浜総合病院 救急部長で、八幡浜市災害医療コーディネーターでもあります、越智先生より発言していただきます。

越智元郎

皆さん、今晩は。市立八幡浜総合病院の越智です。私からは「トモダチ作戦に期待する」と題して発言します。エルドリッチ先生、今日はご苦勞様でした。また、東日本大震災でもトモダチ作戦ありがとうございました。先ほど説明がありました

ける八幡浜市の津波浸水域をハザードマップで示します。市立病院、市役所、警察署、消防本部など市の中心部のほとんどが4メートル以上の浸水域に含まれます。四国全域が甚大な被害を受ける中で、八幡浜市はこの災害に立ち向かう必要があります。私たちは災害派遣医療チーム、自衛隊そして在日米軍のご活動に期待します。

そして、もう一つの想定すべきシナリオは、原子力災害です。伊方原発の30キロ圏内には13万人の住民がおられ、その避難も考える必要があります。30キロ圏内には、入院患者さんが1800人、社会福祉施設などへの入居者が2300人おられます。このうちバスの移動が困難な重症患者さんなどは1000人にのほります。重篤な入院患者さんや職員が、避難体制が整うまで病院で待機する場合も考えられます。その場合の食料や医薬品の確保、補充手段はどのようになるでしょうか。私

たちは災害派遣医療チーム、自衛隊そして在日米軍の活動に期待します。トモダチ作戦が南海トラフ巨大地震や原子力災害においてDMATや自衛隊の活動を担う重要な役割を果たしてくださることを期待します。ご清聴ありがとうございます。

(つづく・全10回)

司会者

それではここで、会場の皆様からのご質問やご意見をいただきましたかと思えます。

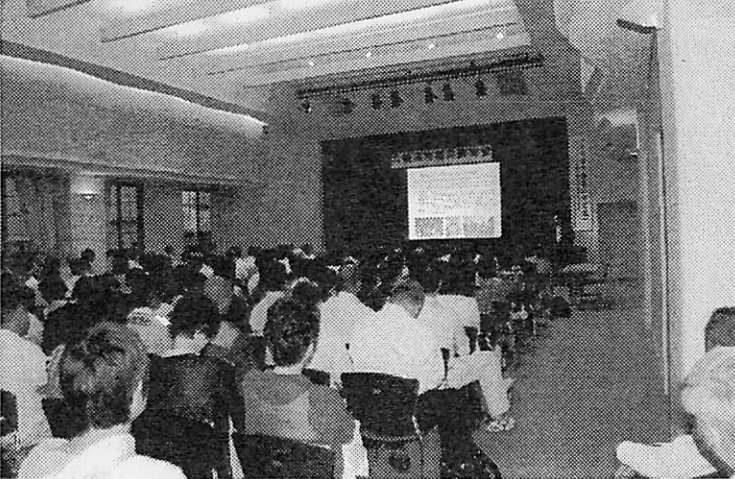
発言者A

八幡浜市のAです。今日はご講演いただきありがとうございます。今までのような米軍との関係などはなかったのです。いい機会ですので、また県の担当者とも相談しながら交流を深めて行きたいと思えます。

先ほど紹介されましたように、新病院の屋上にヘリポートができますけれども、八幡浜市には飛行機が降りるような、そういう所はあまりないと思えます。一方、八幡浜市はフェリー港があり、港としてずっとやっぱりやってきたのですけれども、大災害時に八幡浜港が、外部から救援を受ける場合にその基地としてうまく機能できるかどうか、ご意見があつたらお話を伺いたいと思えます。

エルドリッチ博士

ありがとうございます。まず病院の屋上ヘリポートですけれども、実は昨日、高知大病



院などでヘリポートもちよつと見学したのですが、まあ米軍の観点からすると、やっぱり屋上ヘリポートというのは仰しやつたようにものすごく難しいです。頻繁に訓練しないと、操縦者としてなかなかできない。でするので、そういう難しい作業をするより何かのスペースを確保して、そこに着陸するのは両方にとつて一番容易ですが、そのスペースを確保するのがちよつと課題かなと思えます。輸送機としては、オスプレイが使われることが多いと思うのですけれども、これ現在、海兵隊の輸送機、唯一の中型輸送機ですけれども、だいたいその野球場の中の部分の面積があれば降りられるので、ポイントはその周辺に何があるのか、例えばがれき

できたのですが、もつと早くからその港をきれいにする、すなわちがれき撤去を市民が実施できていたら、さらに早く色々な支援が受けられたのではないかと考えられました。それゆえ、自衛隊が対応する、米軍が対応する、それと同時に自らできることをやってみます考えないと

発言者A

すみません、ありがとうございます。また、今の話を参考にしながら少く考えてみたいと思えます。

エルドリッチ博士

ご提案ですけれども、今佐世保に遠征部隊の船が三隻寄港しているのですけれども、その船の視察を考えていただくというのかもしれませんが、あるいは、その沖繩に遠征部隊を浮かべているのですが、つまり船に乗せる部隊があり、その現地視察を含めて考えたらいいかも思えます。あとは気仙沼や大島の方々との交流を考えたらいいかもしれない。今日、八幡浜港を見たのですけれども、気仙沼と似ていると申し上げたところですよ。

米海兵隊トモダチ作戦のその後

ロバート・D・エルドリッチ博士講演記録 ⑨

文責市立八幡浜総合病院 麻酔科・救急部 越智 元郎

があるかどうかとか、すぐ飛ばせる状態かどうか、ということ

です。一方、港のほうですけれども、それも瓦礫次第ですが、海軍の船、すなわち上陸用舟艇ならある程度対応できます。海軍の専門家がやつぱり視察して確認する必要がありますので、民間の船と違って、相当の無理をしても上陸することがある程度可能です。

大島とか気仙沼を教訓としますと、乗り越えて上陸が

せんでした。しかし、空港は復活できる、復旧できるということとを説得したら、何か希望が湧いて、元気になって、業者と連携したり自衛隊と連携したり、米軍と連携して、国土交通省と連携したり彼らものすごく立ち上がったのです。そして、彼らの力で滑走路3000フィートの半分は空港の関係者と業者の関係者によつてきれいにできたのです。より難しい方は米軍中心にやつているのですけれども、まず彼らの自分の力でできるものをちゃんとやつていまして、あれがすごく良かったと思えます。従つてその例えは、八幡浜で港が大きなダメージを受けた場合、まあ可能な限り、あきらめず自分の力で頑張つたらいいと思えます。そこが大きな

いろいろな参考があちこちにあると思うのですけど、可能な限りたぶん今までにいるんなら研究、研究されてきたと思うのですけれども、特にその地理的な条件、ある社会的な条件が似ているところとより一層のコミュニケーションを取れば、非常に参考になるのかもしれない。気仙沼の市長さんがものすごくいい方で、喜んで教訓となる話を紹介していただけたと思えます。ありがとうございます。

(つづく・全10回)

2014年6月2日

ゆめみかんで講演II

司会者
他に質問はございませんか。

発言者B
市立宇和島病院のBです。今日

は貴重なご講演をどうもありがとうございます。ところで今回初めてこういう米軍の方がこういう地域に来られて、オペレーションで救援していただけたというお話をお伺いしたのですが、実は南海トラフ地震が起こりますと愛媛県の西岸海岸地域のほうの宇和海沿いの津波被害の可能性があります。その時、米軍の支援を仰ぐという場合は、どういう点を、優先順位とかですね、そういうものを考えて、オペレーションというのは行なわれるのか。ちよつとこの自治体も支援していただきたいと思つておられるのか。ちよつとこのオペレーションのやはり優先順位というか、どういう作戦とか、意識決定の要因というものがあのか、というのを伺いたいと思つています。

エルドリッチ博士
大変いい質問ありがとうございます。

でございます。軍はちよつと自衛隊もそうですけど、文民統制の下に置かれておられるので、最終的に政府の関係者で決めることになるのですが、特に日本で行われる作戦はさつき言いましたように日本政府を支援するために従つて、その日本政府が決める順位がおそらく一番配慮されると思つています。さらに、その調整メカニズムとしては市ヶ谷にある調整庁として、横田にある調整庁と先ほど申し上げた現地の調整庁と、少なくとも3つの所があります。そして、要請内容と実施可能性というか、能力的に可能かどうか、あるいはタイミング的に可能かどうか、という調整を行うのですけれども、いずれの要請も基本的に自衛隊を通じて行います。自衛隊というのは、この場合はおそらく統合任務部隊が編成されます。その統合任

務部隊の指揮官にその要請が行く。そこで彼のスタッフの中で対米要請する順位を決める、つまり自衛隊ができるものは自衛隊がするけれども、自衛隊が能力的にできないもの、余裕がないところとか、あるいは何か別の理由でやつてほしいところを自衛隊が決めて、米側に伝えると思つています。さらに、もし孤立している地域に実際に米軍と自衛隊、あるいは日本政府からこの地域は米軍が数日間滞在して救援活動を行う、ということになったら現地の災害対策本部の責任者と現地の米側の窓口の人との間で調整する。例えば、港の話だったら、この部分はやらなくていい、しかし、あの部分をせひややつてほしいとか、そういった細かい調整もできると思つています。地域としては南海トラフの場合、おそらく高知県が非常に大きな作戦地域になると思

つています。あと静岡県、多分まずその二つが大きなポイントになるかなと思つています。最終的に日本政府のここに行け、という命令に従うことになると思つています。

質問者B
分かりました。そうすると、

方針が決まつてそれが地域においてきた段階でしか関わることはないということですね。優先順位も、政府がすべて決めるということですね。

エルドリッチ博士
そうですね。基本的にそんな

な困難が生じる。そういう意味ではじゃあ地方自治体から、直接米軍に要請できないということになる。それはその通りですが、今ポイントなのが、お互いの連携、いずれたぶん震災において協力することになるので、震災の前から名刺交換し

たり、顔の見える関係を作つたり、例えば八幡浜だったらその地理的な状況、先ほどの病院の設備とか、あれ非常に参考になりました。そういうような情報交換や連携を日々行なうことが非常に重要と思つています。

発言者B
実際のオペレーションとかで

なくても、普段からそういう顔を突き合わせた関係を持つていければ、何かあつた時に役立つということは十分あることかなと思つています。ありがとうございます。

発言者C
市立八幡浜総合病院の医師で

Cと申します。今日はありがとうございます。先ほど紹介があつたんですけども、この地域には原子力発電所があります。今日あえてわざと、デリケートな問題なので触れられなかったのかもしれないんですけども、一つの危惧としては、やっぱり原子力発電で何かトラブルがあつた時についていうのは常にわれわれ考えなきゃいけないと思つています。先ほど日本があるいは政府や自衛隊が海兵隊の能力をよく承知していなかったという部分があつたというふう

に先生は言われたと思うんですけども、多分あの時は何が起つておるか日本も分かつてなかつたんだと思うんですけども、海兵隊であれば何かしらにできることが、あるいは力を貸していただける部分というのは原子力災害ということについてあつたのでしようか。

エルドリッチ博士
そうですね。専門的な部隊

が実は存在しているのですけれども、彼らの任務は米国の大統領を守る組織です。普段はワシントンから派遣されない組織です。が、3年前には日本に派遣されました。そこで日本のことを重視しているということだったので、つまり大統領の専属部隊をあえて派遣しました。それはあくまで対応の面で、この最初の段階の原発対応とかはもつと専門性のある組織じゃないといけないと思つますけれども。

発言者C
当時は特に大使館と官邸の

間でちよつとずれがあつたと思つたんですけど、問題の認識とか深刻さについて、正直私は詳しいことはあんまり分かりません。ただ、色んな問題があつたことは多分みんなの共通認識だつたというふうには思つてい

ます。こつちのほうの原発が同

じ状況、条件にあるのかどうかちよつと把握していません。福島島のほうの建設状況がおそらくちよつと特別なものでした。例えば、その非常電源が地下にあつたとか、そこは確か非常に古い建物であつて、その地下に電気の補充機能が置かれていたことが大きな反省点だつたので、すけれども、愛媛の原発に関してはちよつと正直、詳しいことは把握していません。

発言者C
その時の教訓は生かされます

か。

司会者
政府と地元、例えば、四国電

力ががいかに連携ができてい

るかが大きなポイントというふう

に思つています。

発言者C
ありがとうございます。

司会者
それではここで講演会を終了

致します。エルドリッチ先生には有意義な講演をいただき誠にありがとうございます。これからも健康に留意され、益々の活躍を祈念申し上げます。感謝の意味を込めまして、今一度会場の皆様の拍手をお願い致します。以上をもちまして、八幡浜市防災講演会を終了致します。